

巨男の話

新美南吉

青空文庫

巨男 おおおとこ

とお母さんの住んでいたところはここからたいへん遠

くのある森の中でした。

巨男 おおおとこ

男のお母さんはおそろしい魔女 まじよ でした。ほら驚 おどろ のような

高い鼻や、蛇 へび のような鋭 さ い眼 め を持ったあのおそろしい魔女 まじよ でした。

それはあるお月夜のことでしたよ。

魔女 まじよ と巨男 おおおとこ

男がねむりについたころ、だれか家の外から戸を

たたきました。巨男 おおおとこ

男が起きていつて戸をあけてみると、ふた

りの女が、ひとりの少女をつれて立っていたのです。

「この方は、この国の王女様です。私たちは侍女 じじよ なんです。今日 きょう、

森へ遊びにお姫様ひめさまをおつれ申しましたところ、道にまよつてとうとうここへきてしまいました。どうか、今晚こんばんだけ宿やどをかせてください。」とひとりの女がいました。

すると、奥おくから、

「どうぞ、むさいところですが、ゆつくり休んでください。」と魔女まじよがやさしい声でいいました。そこで三人は、中へはいつて休みました。

よく朝、巨男おおおとこが眼めをさましてみると、ふたりの女は、黒い鳥に、お姫ひめさまは白鳥にかわっていました。それは、魔女まじよが、魔法まほうでそうしたのです。

魔女まじよは、巨男おおおとこのとめるのもかまわず、三羽ばの鳥を、窓まどから

投げ出してやりました。三羽の鳥は飛んでいきました。けれど、白鳥は、夕方になると悲しげに鳴いて魔女まじよの家に帰ってきました。巨男おおおとこは不憫ふびんに思つて、こつそりと白鳥を飼かつてやることにしました。昼間は野原へ放つてやつて、夜は自分のベッドの中でねさせました。

巨男おおおとこが、大きくなるにつれて魔女まじよは、だんだん年をとつて、ついに動けなくなりました。それで、毎日ベッドの上に横たわつて、息子むすこの巨男おおおとこに魔法まほうを教えました。けれど、その魔法まほうは、みな、人間を種々の鳥獣ちようじゆうにかえるものでした。

そのうちに、魔女まじよはますます弱つて、もう死にそうになりました。

た。このときに、魔法まほうをとく法ほうを聞いておかねば、あの白鳥は、

いつまでたつても、お姫様ひめさまにかえれないと思つたものですから、

おおおとこ

巨男は、魔女の枕まくらもとによつて、

「いままで、お母さんは人間を種々の鳥獣ちようじゆうにかえる法を教え

てくださいましたが、まだ、魔法まほうをとくことを教えてくれません。

どうか教えてください。」とたのみました。

「では、教えましょう。」と、魔女まじよはいいましたが、もう息もきれぎれで、声は蚊かのようです。

「お母さん、はつきりいつてくださいい！」

おおおとこ

巨男は、魔女まじよの口もとへ耳をもつていきました。

「その鳥獣ちようじゆうが、涙なみだを流せば、もとの姿すがたにかえるよ……」これ

だけいうと、魔女は、頭をたれて死んでしまいましたよ。

巨男は、死んだ魔女を白い棺におさめて、椰子の木の根も

とにうめました。そして、すぐ白鳥をつれて森の家を出ました。

巨男は、都へのぼろうと思いましたが、途中でどうかして、

白鳥に涙を流させようと思いました。頭をたたいたり、お尻をつね

ったりしたのです。けれど白鳥は、けっして一滴さえ涙を出しま

せませんでした。ただ、悲しそうな声をあげたきりでした。おしまい

には、かわいそうになって、巨男はいつのまにか白鳥に頼ず

りをしていました。そして巨男の眼に涙がありました。

巨男は、夜となく昼となく歩き通して、家を出てから七日

目に、めざす都に着きました。けれど、都の人びとは、巨男

がおそろしい魔女まじよの息子むすこだということを知っていましたので、とおまわしに巨男おおおとこを殺そうと考えました。そこでひとりの男が総代そうだいとなつて、王様の住んでいられる宮殿きゆうでんへまいりました。そして、王様にこう申し上げたんです。

「王様の宮殿きゆうでんは、美しいけれど、大理石の建物たてものがないのは、玉にきずだとある旅人たびびとが申しました。大理石の塔とうでもたてられてはいかがですか？」

「なるほど、それはよからう、しかし、大理石というのは、いったいどこにあるのか？」

「ここから、ずーつと南の方へ、山を一つと沙漠さばくを一つこえていくと一つの部落に着きます。そこに、大理石はいくらでもあるそ

うです。」

「そうか、けれどだれがとりにいくのか？」

「それは、いま都みやこにいる巨男おおおとこがよいでしょう。彼はたけが椰子や子しの木ほどで、一足で小さな丘おかをこえてしまいます。」

「では、その男をよべ。」

巨男おおおとこは宮殿きゆうでんにつれられていきました。そして王様から、

大理石をとりにかくように命ぜられました。にげるといけないからというので、巨男おおおとこの足には鉄の鎖くさりがむすばれました。

「ではいつてきます。」と巨男おおおとこはいつて、やはり白鳥をつれ、

南の方へ旅立ちました。巨男おおおとこの進むにつれて、宮殿きゆうでんにた

まっていた鎖くさりが少なくなりしました。ちょうど十九日目に、その鎖のたまりはなくなつて、はしが太い柱にむすばれてある鎖くさりは、ピンははりました。

そのときには、巨男おおおとこも種々難儀なんぎをして、大理石の部落に着いていました。部落の人びとは、たいへん親切でしたので、大理石をいくらでもくれました。巨男おおおとこは大きな大理石を三つもらつて、それを背負せおい、白鳥をその上にとまらして帰途きとにつきました。

都みやこの方では、はつていた鎖くさりがゆるんできたので、人びとはそれをたぐりました。帰りには、重い石をもつていたので、巨男おおおとこは三十日かかってやっと都に到着とうちやくしました。

苦しい長い旅のために、巨男おおおとこはやつれはてて枯木かれきのように

なりました。しかしそれでもゆるされなかつたんです。すぐその

日から、宮庭きゆうていの泉いずみのほとりに、大理石で塔とうをたてることをお

おせつかりました。けれど、心の美しい巨男おおおとこは、けつしてな

げいたり、悲しんだりしなかつたのですよ。命ぜられた通り、毎

日毎夜、つちとのみを持つて、大理石を切り、それをだんだんつ

みかさねていきました。巨男おおおとこは、仕事をしているときでもあ

の白鳥を背せにとまらしていました。白鳥もおとなしくとまってい

ました。巨男おおおとこは、つちをふりながらちようど人間にいうよう

に白鳥にいいました。

「お前は、いつたいどうしたら涙なみだを流すのか？ お前はいつ涙なみだを流すのか？ お前は涙なみだを流さなくては、いつまでたつても、お姫ひめさまにはなれないのだよ、私はお前がかわいそうだ。だから早く美しいもののお姫様ひめさまにかえつてくれ。」

そんなときには、白鳥は首をたれて巨男おおおとこの話聞いていましたが、涙なみだを流したことはありませんでした。

巨男おおおとこの仕事は、どんどん進んでいきました。夜ふけでも、つみ上げられた塔とうの上から、つちの音が都みやこの空にひびきました。都の人びとは、ねる前に、きつと窓まどをあけて巨男おおおとこの働いている塔とうの上をみました。そこには、星と同じような灯ひの光が、またたいていたんです。

三月もたつと、巨男おおおとこがとつてきた大理石はつきてしまいま

した。塔とうの高さは宮殿きゆうでんのどの建物たてものよりも高くなりました。

それでも、王様は、それでよいとはおっしゃいませんでした。そこで、巨男おおおとこはふたたび南方へ旅立ちました。長い鎖くさりをひきず

つて、白鳥をつれ、巨男おおおとこは広い広い沙漠さばくをくる日もくる日も

歩いていきました。巨男おおおとこは、また大きな大理石を三つもらつ

て都みやこに帰りました。すぐその日からつちとのみをとつてそれを切

りはじめました。

塔とうはますます高くなりましたよ。

空がくもつて星がみられない夜でも、巨男おおおとこの灯ひはたった一

つの星のようにポツンとうかび出ていました。

それは、すこし風のつよい宵よいでした。都みやこの人びとは、窓まどから塔とうの上の灯ひをあおいでみました。灯ひは風のために、ゆらゆらゆれていました。人びとはそのとき、はじめて巨男おおおとこがかわいそうになりました。王様も窓まどから顔をお出しになって、塔とうの上をみました。ごーごーとなる風のすきまに、巨男おおおとこのつちの音がかすかに聞こえてきました。やはり王様も巨男おおおとこをあわれに思ひに
なつたのか、

「こんな夜に働かせておくのは氣きの毒どくだ。それにあの男は、おとなしい。明日あしたはもうあの仕事をやめさせよう。」とひとりいわれました。そんなことはすこしも知らずに、巨男おおおとこはこつこつや

つていました。そして、どんなことをしたら白鳥をなかせてお姫めさま様にさせることができるだろうと考えていました。ふと、巨おおお

男とこは自分が死んだら——と考えました。そこで、温かい巨おおお

男この背せでねむっている白鳥に話しかけました。

「私が死んだら、お前は悲しくないか？」

すると白鳥は眼めをさまして、「そんなことをしてはいけない」というように羽ばたきました。

「私が死んではいけないのかい？ それなら、私が死んだらお前

は涙なみだを流すにちがいない。よし！ 私はお前のために天国へいこ

う。」

巨おおお男とこは立ちあがって、背せ中から白鳥をおろしました。白鳥

は、とめようとして、巨男おおおとこの着物のはしを引きました。巨男おおお

男とこは、白鳥と最後の頬ほおずりをして、

「では、かわいい白鳥よ、さようなら、お前はもとの美しいお姫ひめ様めさまに帰るのだよ……」といって、高い塔とうの上から身を投げました。地に落ちるとただちに死んでしまいました。

白鳥は、どんなになげいたことでしょう。涙なみだは滝たきのように出ま

した。そして、そのとき魔法まほうはとけて、うるわしいもとの王女に

なりました。王女はなきじやくりながら、高い塔とうの階かい段だんをころ

がるように走りおりて、お父さまの王様の部屋にとびこみました。

そして、いままでのことを王様に話したんです。王様はそれを

聞いて、面おもてをふせて巨男おおおとこに謝罪しやざいし、また感謝かんしやしました。

まもなく、王様から都みやこの人びとへそれが伝えられたとき、都の

人びともないて巨男おおおとこにあやまりました。

巨男おおおとこのむくろは月桂樹げっけいじゆの葉でおおわれて都の東にある沙さ丘きゆうに葬ほうむられました。

王女は、よく王様やお母さんの后きさきに申しましたよ。

「私は、いつまでも白鳥でいて、巨男おおおとこの背中せなかにとまっていた
かったわ。」

空がくもっていて、金星がたった一つうるんでみえる夜ふけな
ど、南国の人びとはいまでも、

「あれは、巨男おおおとこの灯ひだ。」と空をあおいで申します。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書
入力：もりみつじゅんじ

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

巨男の話

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>